

委員長

皆さん、おはようございます。市長の鈴木でございます。今日は皆様お忙しい中、土曜日の朝、だいぶ暑くなつてまいりましたが、そういう中で、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。早いもので今年度の平和宣言文の起草委員会、今回で3回目、最終回でございます。これまで2回も皆様方から本当に貴重なご意見を賜り、我々の起草にあたって大変参考になる、有益なご意見をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

今回、第2回で素案を示させていただきまして、第2回における皆様方のご意見なども踏まえまして、修正した案を皆様方にお送りさせていただいたところでございます。前回から大幅に変わっております。特に、冒頭、私の両親の被爆の話も引用して、当初の原爆投下の目標が天候により変更になったことなども触れさせていただきましたが、苦渋の決断でありましたが、その部分は全体の分量、ボリュームの制約もありますので、今回入っておりません。なぜここは入らなかったかと言いますと、逆にどうしても入れたいことが、出てきたということでございます。それは何かというと、冒頭に書かせていただいております。その後、第2回からのこの1か月ぐらいの間に、世界で武力衝突に関する様々なニュースが飛び込んでまいりました。本当に危機的な状況だと改めて認識しております。これはどんどん武力衝突、武力紛争の当事者も拡大していると思っております。そういう中で、今のこの武力紛争をもうやめてほしいという、何らかのかたちで、強くまず前面に出さなくてはいけないという思いに駆られまして、そこが、まず最初にくるのだらうということで、それをはめる中で、私の個人的なことといひますか、一人称の部分が入る余地が、なくなってきたということでございます。

それから、前回のご意見の中で、やはりノーベル平和賞受賞の話で、日本被団協についても、皆さんからも話がありましたので、そこは改めて書かせていただきました。それにつなげるかたちで、地球市民という言葉がなぜ長崎に根付いたのか。その背景的なところ、少し説明的にはなりますが、触れさせていただいております。そういうことを訴える中で、当事者というキーワードを使って、1つには、世界中の我々というのは、誰もが核兵器の脅威にさらされている当事者だという意味での当事者であると同時に、我々一人一人、誰もが、地球市民として、世界を動かしていく、変えていく当事者にもなりうるということ。そういう意味で、いろんな意味での当事者ということを、この宣言文の中で使わせていただきました。そういうかたちで大幅な修正となりましたが、そういう背景事情もお含みおきの上で、今日ご審議賜ればと思っております。今年は被爆80年、戦後80年という中、長崎ならではの宣言文にしたいと思いますので、どうぞ今日ご審議のほどよろしくお願いいたします。

はい、それでは議事を私の方で進行させていただきます。先ほど事務局からも申し上げておりますが、今回お配りしております平和宣言文案をもとに、委員の皆様からご意

見をいただきたいと思いますので、どうぞ忌憚のないご意見を賜ればと思います。それではまず、私の方から宣言文案を朗読させていただきたいと思います。

～宣言文案の朗読～

以上でございます。ありがとうございます。それでは、委員の皆様方からご意見をいただきたいと思います。時計回りで委員から順にお願いしたいと思います。それでは委員お願いします。

委員

前回の案からずいぶん変わってきて、今、市長のご挨拶の中でも、ずいぶん熟考された上で苦渋の決断というお話もありましたが、なるほどそういうことかということもないわけではないのですが、一言で言うと、言わなくてはいけないことはきちんとロジカルに入っている。けれども、インパクトがなくなったという印象です。イスラエルやガザという、固有名詞が消えているのと被爆 80 年の年ということが、80 年というのは国連創設 80 年が出てくるのですが、80 年の節目の年の宣言だということも、言った方がいいのではないかなと思います。あと、いわゆる核抑止についてはこの通りですが、この前のアメリカによるイランの核製造工場の攻撃については、核をもたせないために攻撃をするという、いわゆる核抑止の範疇にとどまらない展開になってきていると思ったりして、それはどうしたらいいのかなと。私自身、この文章の中にどう反映させたいかという整理はついてないのですが。でも、非核兵器国が核保有を試みていることを、攻撃でやめさせるということが許されるなら、それは北朝鮮の核工場を攻撃してもいいような話になりかねないような気がしますので、それも言わなくていいのかなという気はします。あと、最後のところの、山口仙二さんの言葉で締めになっています。これまで、被爆者の言葉を、宣言に引用することを、慣例みたいにしてやってきたわけですが、今ここに集っている人や、日頃平和に関わっている人であれば、山口仙二さんのことは知っておられると思いますし、これが国連で初めて被爆者が演説した時の言葉だということも、そういう人たちは知っていると思いますが、全国、全世界に発信するという意味合いで言えば、それが明確に伝わる短い説明が入った方が良かったと思います。以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。続いて委員お願いします。

委員

はい。ありがとうございます。私は前回、今の平和が直面している課題、あるいは危機的な状況という根底に、民主主義が後退している、あるいは力が弱まっている。独裁

的あるいは権威主義的な、制度上の民主主義が広がっていることを申し上げました。そこを、どうやって乗り越えていくのかというのが平和の基本的な課題で、そう考えると地球市民という横断的な考え方で民主主義を立て直していく、あるいは民の声で政治を変えていくというメッセージが私は伝わっていると思います。あまり民主主義論に入ると宣言文らしくないと思いますので、そういう意味ではこの地球市民というキーワードの中にいろんな意味が込められて、まさに自治体の皆さんが集まっている最中に、こういうことが語られて、そういう趣旨をキーワードにして伝えることは、多くの市民の人们、平和の担い手である皆さんに届くメッセージかと思いました。

委員長

はい。ありがとうございました。続いて委員をお願いします。

委員

この前欠席しましたので、ちぐはぐなところもあると思いますが、まず全体的にパンチ力が足りないと思います。その中で、特にやはり被爆 80 年という言葉はなくなっているとか、フリードネス委員長が核のタブーということで、この核のタブーは被爆者が草の根の運動で実相を伝えた結果、そういう風になってきたわけです。その核のタブーが打ち破られようとしているということもはっきり述べていったほうがいいのではないかと思います。それと、最初のこの 1 行目です。各地で起きている紛争と言ったら、そんなに大きな戦いではないと私は理解しているのです。やはり、ロシアの言葉もイスラエルの言葉もないわけですから、もっとはっきり、それだということを示して、やはり戦争という言葉を出していくというか、言葉を入れてほしいと思います。それとやはり、多くの非戦闘員が亡くなっているということです。言うならば、戦闘員よりも非戦闘員がたくさん犠牲になっているということも訴えてもらいたいと思います。それから、10 行目ですね、そのような残忍で非人道的な核兵器というのは、絶滅だけを目的とした武器であるわけで、そういったところを、やはり強調していく、その点も入れてほしいと思います。

それから 17 行目から 18 行目です。そこはやはり「世界の挨拶」の中で「私たちは自らを救うとともに」ということを加えてほしいです。それと、被爆者の言葉がないというのは、特にパンチ力に欠けているのではないかと。61 行目から 64 行目も山口さんの言葉が発せられていますけれど、もう少し被爆者の声を宣言の中に入れてほしいと。それから今までずっと言われていた「長崎を最後の被爆地に」です。その言葉も抜けているような気がします。

それと、27 行目 28 行目です。「核兵器を使わせないために、核兵器を持つ。」言葉としてみんなの中に落ちていくのかという。あまりこの言葉は馴染まないという感じもあります。それと、日本は、憲法の中で戦争放棄と戦力不保持を謳っているわけですが、そ

の日本が世界第 10 位の軍事大国になっていると。軍拡競争の中に日本が巻き込まれていっていることについては、やはり警鐘を鳴らしていくべきだと思っております。それと、53 行目の「被爆者の援護のさらなる充実」ということですが、私たち被爆者は、国家補償を求めているわけです。それは国が再び戦争をしない証、この援護法の中に、不戦のはっきりした言葉。言うならば、今までに政府は、被爆者、それから非戦闘員で亡くなった人たちに謝罪もしてないし、特に軍人や軍属には恩給法があって、今までに 60 兆円の金が支払われているわけですが。一般国民の犠牲者については、まったく死者に対して補償されていないと。だから、そういうことで私たちは援護法をとっているのです。これはその国家補償の援護法を求めていることをやはり書いてほしいと思います。それぐらいであとお願いしたいと思います。ありがとうございました。

委員長

はい。ありがとうございました。続いて委員をお願いします。

委員

はい、別の委員もおっしゃいましたが、私も実は正直言って、昨日送られてきて、読んでわざわざ裏を見たのです。まだなにかあるのではないかと。それこそ本当に、人間は生きてたのに、そういう人間の存在というのが私は、紛争国の代表者も来るから、その程度で収められたのかと。悪い表現ですが、各国からお見えになるから、こんなふうに書かれたのかと思います。この宣言文は、長崎県下の小中高生は、8 月 9 日は登校日です。子どもたちは全部聞いているわけで、子どもたちの心にどれくらいこの文章が響くのかと正直思いました。だから私たちはここに被爆者の寿命は少ないと書いてありますが、やはり私は、被爆者の一人として、これを読んで、本当にまだなにかあるのではないかと裏を返してみたぐらいに、ずいぶん変わっていると思いました。今までとは変わられたなという。被爆者の生の声というか、人間の存在。人間が存在していた、子どもがとにかくいたのだという、今の場所を見てよくわかりますよね。子ども、女性が犠牲になっているという。それで、私はこれを読んでふっと思い出しました。多分これは三好達治さんだろうと思います。これでは今、地球市民という言葉がたくさん出ていますが、私は時々、子どもに言うのです。地球というのは宇宙の中の 1 つの星でしょ。星でしょ。ある人が言ったのよと。昔、昔、あの星に、あの星は地球のことよ。昔、昔、あの星に、賢い、賢いサルが住んでいたと。サルというのは人間のことです。人間がみんなが核を使って、その星はダメになってしまったというの、そう書かれている。だから私は賢いサルが住んでいたような、そんなだったら大変だねというのは、私、子どもたちに言うのです。地球という星を、地球儀を見てもらって、みんな今線が引いてあって、宇宙から見たら地球にはそれなんか見えてないでしょ。だからその辺を子どもたちに、本当にこの宣言文というのは聞いています。子どもにも届くような、先ほど被爆者

の声というので、去年は福田須磨子さんの、わざわざ愛媛県から会いに来たというわけです。だから私もやはりなんとなく、もう少し何かほしいなと、では何かと言われたら、すぐは即答できないのですが。もう少しやはりインパクトがほしいなという。それから「長崎を最後の被爆地に」という、これは本当に繰り返すから電車もそれをつけて走っているわけです。長崎の電車、長崎を最後に、なぜあの電車があんな風にしてその言葉を使って走っているか。私はあれは本当に大切な言葉。「長崎を最後の被爆地に」という。その言葉がこの中には入ってないと思いました。以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。続いて委員お願いします。

委員

はい、ありがとうございます。冒頭、市長のご発言にもありましたように、本当に苦渋の決断で、いろんなものを省いて、入れるものは入れてというところが伝わってきました。そして、市長の思いや、このように宣言文の素案が変わった経緯も含めて、全面的に共感するとともに、その上で、4点ほど、私の方からは提案というか意見を述べさせていただきます。

まず、冒頭、以前は市長の二世としての私というところで始まっておりましたが、やはりこのインパクト、非常に大きくて、心にも響くものだったので、正直捨てるのが難しいという思いは私にもあります。ですので、今年度は難しいのかもしれないですが、ぜひ来年度以降とかに入れるかたちで、ぜひこのアイデアは残しておいていただけたらなと思っています。

そしてまた冒頭のところで、少し思ったのがあるのですが、1行目です。紛争の当事者の皆さんのところ。これを私が文章で読んだとき、それから言葉として聞いたときに思ったのが2つありまして、まず1つが当事者の皆さんというところ。政治家と国民を大きく2つに分けて当事者と言えるかと思うのですが、どの立場の人なのかというのを思いました。そして2つ目に、紛争の当事者です。本当に世界各地でいろんな紛争が起きている、いろんな争いが起きている中で、それぞれの紛争の当事者が、自分のことだとピンとくるかどうかは少し疑問に思いました。ですので、ここは表現方法のいかんで、いくらでも届くかたちになると思いますが、世界の紛争の当事者の皆さんという言葉を残して、あえて様々な解釈を残すのか、それとも世界の指導者の皆さんのように具体的に定めるかというところをもっと検討できたらと思っています、ここは表現方法を工夫すると良いかと思っています。

そして次、2点目です。ここが9行目と、16行目、17行目と少し被っているのですが、両方をまたぎながらお伝えできればと思います。「核兵器は、あなたや大切な人の日常と未来を一瞬にして奪い去ってしまいます。たとえ、一命をとりとめたとしても、放射

線が時をかけて体を蝕み続けるのです」という部分です。ここと放射線が体を蝕み続けるというところと、16 行目から 17 行目のところです。「原爆による心と体の深い傷、そして差別や困窮にもがき苦しむ中で」というところ、ここは少しリンクするのかなと思いました。9 行目の方が最初に私たちが聞いて把握をするところだと思いますが、ここだけを聞いたときに、原爆による被害、大まかな被害では放射線以外にも、ケロイドが残ってしまったり、体の傷はもちろんですが、その後の人生の中での、差別や偏見ということも十分に大きな被害とも言えますので、その部分は 9 行目のところで触れた方が望ましいかと思いました。そして 16 行目から 17 行目です。「被爆から 11 年後の 1956 年…」で、ここ長崎で次のように宣言して結成されましたという、この文章の一文がやや長い印象が個人的にありましたので、心と体の深い傷、差別や困窮という大きな被害のところは 9 行目にまとめてもいいのではないかと思います。

次、3 点目ですね。これが最後の方で 58 行目にあります。「長崎は被爆地の使命として、被爆の実相を伝え、核兵器廃絶を訴え続けてまいります」の部分です。私たちは長崎として、やはり核兵器廃絶をずっと訴え続けていますが、訴えるだけではなくて、具体的な行動がすごく大事になってくるかと思います。ですので、ここで被爆地長崎として何ができるか、そして何をしていくかを入れる方がいいのではないかと思います。具体的に言えば、例えば被爆体験の継承の強化とか、そういった具体的な文言を入れて、被爆地長崎として何をしていくかというのを明確に発信できたらいいのではないかと思います。

それから最後 4 点目なのですが、今まで他の委員の方々からご指摘がありましたように、61 行目から 64 行目です。「ノーモア・ヒロシマ ノーモア・ナガサキ ノーモア・ウォー ノーモア・ヒバクシャ」の部分です。ここはせっかくのキープフレーズでありますので、被爆者山口仙二さんのお言葉だということを明確に言及するのが望ましいと思います。以上になります。ありがとうございます。

委員長

はい。ありがとうございました。続いて委員お願いします。

委員

お疲れ様です。私の方からも意見を述べさせていただきます。今回、先ほど市長のお話の中から、当事者というのがキーワードだと言及いただきました。加えて、地球市民としてのメッセージ性の一貫性も意識して作られていると思ったのですが、地球市民をコンセプトの核に据えるのであれば、それぞれの文章が、よりシャープにできるのではないかと感じました。私は、地球市民は 24 行目から 25 行目に定義されている通り、人種や国境などの垣根を越えて、同じ地球に暮らす一員として共に考え、共に行動しようという思いが込められているという、この言葉の通りに受け止めていまして、この概念

というのは、核問題に限らず、あらゆる政策に対しての、基本的なスタンスだと思っています。そこをよりこだわった文章にしてほしいと思います。例えば、1行目から3行目の文章の後に、世界の皆さん想像してみてくださいということで、「もしも、あなたが暮らすまちに」と書いてあるのですが、あなたが使われるかもしれないですよという言葉は、だから核武装しようという考えにもつながりやすい考えなのかという気がしてしまいました。どちらかというと、地球市民というスタンスを考えたときに、あなたのまちに落とされる可能性でもあり、あなたが使用しているものというのは、人間に対して使おうとしているという、そこに対して理性的になれないのかというのが、地球市民というスタンスの考えではないかと思ったときに、あなたが暮らすまちというメッセージだけでは、地球市民のスタンスが十分に伝えきれないのではないかという印象を受けました。

また、そのつながりですが、1行目の「世界各地で起きている紛争当事者の皆さん」という呼びかけがあって、これはその通りだと思う一方で、私は現在のガザやウクライナの情勢を考えたときに、必ずしも当事者と言われている国だけの問題なのかというと、私はそうではないと思います。私は、日本政府がなぜもっとイスラエルに対して人道的な行動をしろと、もっと強く言えないのかということに対して、長崎から憤り、悔しさを覚えています。やはり世界の国々が今の状況はおかしいということを、長崎だからこそ主張できると考えたときに、このことについて考えてもらうべきは、紛争当事者と言われる国の人たちだけではなくて、世界中の人たちみんなではないかと感じます。というところで、この1行目は、私はこれだけではなくて、もっと踏み込んでほしいという印象を受けました。

また、先ほど先生の方から、ウクライナのことや、ガザのことを具体的に言及した方がいいという話がありましたが、私もそう思いました。そうでないと、自分はその発言の対象外だといくらでも考えられてしまうからです。やはり具体的なことを言及した方がいいと感じました。あと2つ各論的ですが、新たに追加されたところとして、この33行目から38行目の平和首長会議についての言及が増えたと思います。これはとても大事な部分だと思うのですが、先ほど言われた「被爆80年」とか、「核のタブー」とか、「長崎を最後の被爆地に」というとても大事な要素を削って、ここのボリュームが増えたというのは、やや違和感がありました。もっとこっちの方に文章を言及した方がいいと思います。被爆80年の平和宣言は後から読み返してもらいたい宣言でもあるので、そう考えると、普遍的な部分と言いますか、後世の人たちに対するメッセージという意味も含めて言及してほしいと思います。また、重複になりますが、やはり私は前回のときに主張した通り、被団協の方々が言っておられる国家補償としての被爆者援護法については、この文脈、特に地球市民の文脈を語るときに、戦争の当事者というのは、戦争というのは、みんなの心の中で始まっていくものだと思いますので、それをここにとどめるという意味、不戦の誓いを心にとどめるという意味でも、やはりこの文脈で触れて

ほしいと感じました。すみません、まとまりがなくて。以上です。

委員長

はい。ありがとうございました。続いて委員お願いします。

委員

はい、最初に1行目から3行目をもってきたというのは前回から大きく世界情勢が変わる中で、被爆地としてやはりまずそこを、というところは非常に共感するところがありました。さっき委員も言われたように、やはり当事者というときに、紛争地の被災者も含むような印象を受けてしまうので、国民と言いますか、そこにやめてくださいと言っても止められないわけで。このままいくなら、指導者の皆さんと当事者を何度も使っていくという方針ではあると思うのですが、ここはやはり指導者というような、あるいは責任者というような言葉だと思いました。

それから、4行目と言いますか、結局、第二次大戦下で米国が広島、長崎に核兵器を投下して、そして何が起きたのかということを簡潔に入れる必要があると思います。原爆が投下されてどうなったのかが入っていないので、被爆地の宣言として弱まったのではないかと思います。先日のトランプ大統領のイランの攻撃の後の発言でもありましたが、原爆投下の正当化論というのが米国で根強いということを改めて思いましたし、原爆投下の理由を掲げて正当化することは、自国にとって理屈をつければ、核兵器の使用を認めることになるわけです。そういう正義のための核兵器使用というものは、そんなものはないわけで、使ってはならない凶悪な兵器でありまして。私たちはそれを知っているというところで、やはり1つの宣言ができると思うのです。正当化を絶対に許してはならないというところは、すごく言葉にしなくても、やはり込めるべきだと思います。正直に言えば、トランプ大統領には原爆を使ったことを心から反省し、後悔をしてもらいたいと思いますが。本来は被爆地として、そこに対して、そういった考え方が、やはりよくわかりませんが、主流なのかもしれませんが、怒りの表明をしてもらいたいという気持ちはあります。米国が、原爆を投下した長崎で、何が起きたのか、そこは少なくとも言葉にした方がいいと思いますし、多少泥臭くても、そこは入れた方がいいと思いますし、その部分、特にやはり市長は魂を込めて、訴えてもらいたいと思います。

それから50行目です、非核三原則を入れていただいて、堅持を入れていただいてよかったと思います。核共有などの論議は、現実味を増していると思いますし、米国の圧力というのが、今後強まっていくことが想定されますので、非核三原則の堅持、法制化ということの主張は本来、国是であって、言うまでもないことですが、これを言わざるを得ないような状況になってきているという意味では、ここを入れていただいて良かったと思いますが、非核三原則というだけではなかなか伝わらないので、やはり核を持たず、作らず、持ち込ませずの非核三原則というような言葉を入れられたら、やはり入れ

ていただきたいと思います。

それから 50 行目、51 行目ぐらいですが、核抑止に頼らない、安全保障政策の部分ですが、これは前の段落でせつかく、憲法の平和の理念を盛り込んでもらっているのですが、ここは委員からもありましたが、やはり現在の日本の状況ですね、軍備拡大されていると。そこに危機感がある以上は、核抑止や軍備、例えば軍備拡大に頼らない安全保障政策というような、軍備の拡大の部分にも一言、言葉を入れてもらいたいと思います。被爆地にとってすごく憂慮すべきことだと思いますし、軍備の拡大ではなくて、対話にエネルギーや資金を注ぎ込むべきだと思います。あと最後に、54 行目の被爆体験者のところですが、救済を強く要請するということは言っているのですが、ここは改めて政治判断をしてくださいと強く要請するという、誰が主体で、誰に何を判断させるのかというところでは、政治判断を要請しますと、救済に向けて政治判断を要請しますという言及を入れてもらえたらと思います。以上です。

委員長

はい、ありがとうございます。続いて委員をお願いします。

委員

はい。正直に申し上げますと、私の文章の好みからいくと、前回の市長の一人称から始まる文章の方が私は好きでした。ですから、今回は無理でも来年以降にそういう出だしの文章をまた考えてもらってもいいかと思っていますが、冒頭、市長の説明にありました、今の世界情勢のいろんな変化等々を踏まえて盛り込まないといけないことも増えたという説明で、こんなに大幅に変わったことについてはよく理解させていただきました。

それで、何回か読んでみると、地球市民という言葉と当事者という言葉が頻繁に出てきて、随所に散りばめられているので、この 2 つが、この文章のキーワードだと思っていますが、文章の立て付けを何回も見ている、誰に対する呼びかけなのかということ整理をすると、まず冒頭に、いきなり世界各地で起きている紛争の当事者というよりも、先ほどから出ているように戦争をしている国の指導者という方が呼びかけだと思うのですが。そういう呼びかけがまずきて、次に世界の皆さん、これは世界の皆さんに核兵器は改めて本当に恐ろしいものなのですというお話をします。次に、被団協のノーベル平和賞の受賞をイントロにして、地球市民がいかなるものかみたいな概念の説明がここに入って。次に、また改めて世界の皆さんに対話を重ねて共感を広げてくださいというのがきて。その次の呼びかけとしては、世界の国々の指導者の人たち、戦争をしてない国々の指導者の皆さんということになってと解釈したのですが、呼びかけの順番というのが、ずっと腹落ちしてこなかったというのが印象です。

地球市民というのが非常にキーワードになっていくので、私的にはこの 15 行目からくる、これは誰もが知っている、被団協がノーベル平和賞を受けたというフレーズから

まず入って、ここで地球市民という概念をまず冒頭にお話しされるのも1つの手かなと思いました。その後に、世界の皆さん、想像してみてくださいという、5行目からの核の恐ろしさを改めて伝えるという、そのフレーズの後に、そのまま32行目の世界中の皆さんと改めて言い直す必要もなく、13行目から続いて、この核は怖いものです。そして皆さん、対話を重ねましょうという、そういう流れになったら、よりすっときた感じがするんですが。その後に、いわゆる戦争している国の指導者の皆さん、そしてそれ以外の世界の指導者の皆さん、こうこうあってくださいというのがくると、すっと腹落ちをすると感じて読みました。これはいろんな考えがあると思いますので、皆さんに任せるのですが。

それで、もう1つ、やはり被爆80周年ということ、それと核のタブー、核の使用はもちろん、所有のタブー、そして「長崎を最後の被爆地に」という本当に重要な言葉がなくなっているということについては、少し残念だと思いました。その辺はなんとか入れてほしいという気もいたしました。

最後にもう1つ、これは少しひねくれた考えなのかもしれませんが、原爆慰霊祭、平和祈念式典だから当然ですが、57行目の「原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げます」という、これは当然ではあるのですが、私はよく考えると、今年は被爆80年でもあり、終戦80年、戦後80年となって原子爆弾で亡くなられた方以外にも、普通の爆弾や地上戦で亡くなった方々も、ものすごくいらっしゃるの、原爆によって亡くなられた方々にあえて哀悼の誠を捧げますというのも、よく考えると違和感があったりする。少しそこが気になりました。一言、言わせていただきました。

委員長

はい、ありがとうございます。続いて委員、お願いします。

委員

はい。市長が最初におっしゃったように、当事者というのをキーワードに苦渋の選択で構成された案であると思いながら拝読いたしました。地球市民に向けたものであるということで、一貫した内容で、前回よりもとてもすっとわかりやすくなったように感じます。その中で、やはり皆様の中でありました、人間の存在や、人間の生々しさ、伝わりやすさというのは何かと考えながら見ていたときに、最後の61行目から64行目の「ノーモア・ヒロシマ ノーモア・ナガサキ」のところは、やはり山口仙二さんの言葉であるということと、44行目に国連憲章のこともありますので。国連で初めて被爆者が訴えたという説明があってもいいと思いました。その分の文章を足すのが大変だということであれば、例えば1行目から3行目を省略して、世界の皆さん、想像してみてくださいというように、紛争地域だけではなく、地球市民という目で世界全体に広く訴えているところから始まるのも1つの手かと感じます。そして本当に前回からこれまでで

上に、核のことについて考えるときに深刻な状況になってきているので、それをどうしたらいいのだろうと考えていたのですが、地球市民というのを考えた際に、43 行目で「地球市民の一員である、世界の国々の指導者の皆さん。」ということで、あなた、指導者も地球市民の一員ですよと明言されているのは、全体としてもやはり成立していますし、政治家に対する訴求として1つ強いものがあるので、いいなと感じました。あと、皆さんもおっしゃっていますが、市長の一人称というのを、次回以降、一個人として活用していただけたらと感じました。私からは以上です。

委員長

はい、ありがとうございました。続いて、委員をお願いします。

委員

はい、前回からかなり変わっているので、本当にご苦労されたのだろうと、そこに込められた意図を考えながら読んでいたのですが、今、本当に刻々と世界情勢が変わっている中なので、そこに言及することは、当然というか、逆にそうしないと現実を踏まえていないと思われかねないので、そのことにはとても賛成をしています。全体的にすっきりしすぎているのではないかと、インパクトがないというのは、同じ感想をもちまして、なぜかと考えていたのですが、一般の方に、あなたも当事者ですよとか、指導者の方に、私たちはこういうルールの中で生きていますよということを、わざわざ言うことをしない方が長崎らしいと思っていました。というのは、地球市民という言葉自体が、本当に究極の包摂の概念で、みんな仲間だし、身近にいれば争っている国同士の人でも仲間だと言えるぐらい、人というのは分かり合えるものだから、もっとインクルーシブにやっていきましょうというのが、どちらかというと長崎のスタンスで、実際今回の式典にも戦争当事国の皆さんも招待されたという、姿勢そのものが本当に長崎らしいですし、実際そこにいらっしゃっていることを考えたときに、もうやめましょうとか、もっと真剣に自分たちのことだと思ひましょう、という言葉ではない方法で、やはり争いはよくないとか、原子爆弾はなくしたいと伝えたいと思ったのです。その姿勢そのものが、本当に分断の真逆の思想だと思っています。抽象的な話になったのですが、具体的には、地球市民という概念を、長崎の中では根付かせてきたというお話を前半にされて、その上でみんな地球市民として行動すべきではないでしょうかと言っているのですが、すべきではないでしょうか、というよりはもうすでに私たちは行動して、そうなっていることを改めて感じてもらう。音楽やスポーツを、国境を超えてすでに一緒に楽しめていること自体も現実であるし、私たちはそういうふうに生きられていることを、改めて分かってもらって、その上で政治というものが、一部の指導者のものではなくて、ここに生きるみんなのものであることを、改めてわかってもらうとか、その人たちの思うようにさせてはいけないという、少し強く言うと、そういうこともあると思うのですが。

だから、みんなで参加して違う文脈で平和な世界を作っていきましょうということを一般の方には伝えたいと思ったのが1つと、もう1つは、やはり国連や平和憲法であったり、80年前の戦争の反省を踏まえて、実際にみんなでこういうふうにしていこうと決めたことを、本当に忘れて今こういう状況になっているということ自体が、本当に人間の愚かさとか弱さだと思うので、そういった部分で当時の苦しみをやはり改めて伝える必要があるというところは、そういった意味で必要だと思いますし、実際に今、戦争の中で自分の力ではどうしようもなく、戦火に巻き込まれている方たちもたくさんいらっしゃるの、やはり苦しみとか、当事者の方の声を伝えることによって、今また戦争の文化にいきつつあるところを変えていこうという呼びかけにした方がいいかと思いました。なので、盛り込まれている要素としては、必要なものだと思うのですが、ストーリーといいますか、流れだったり、なぜそういうことを伝えているのかが、わかるように伝えられるといいと思いました。具体的にこうした方がいいということが言えなくて申し訳ないですが。あともう1点、すごく細かいことと言うと、平和首長会議のところに関しても、地域のトップの皆さんが頑張りますというよりは、やはり自分のまちもそこに参加していること自体がすごく勇気になると思うので、違うところでもこういうふうに団結して頑張っていることが伝わるいいと思いました。以上です。

委員長

はい、ありがとうございます。続きまして、委員お願いします。

委員

はい、私はこの宣言を読ませていただいて、前回の委員の皆さんの意見などがしっかり反映されていて、また政治とか専門知識をもたない人々にもわかりやすく伝わるような文章になっていると感じました。その上で、より良い宣言文に近づけるために、私の方から4点提案とともに感じたことを共有させていただきます

まず1点目は、冒頭の1行目から3行目についてです。先ほども複数の委員の方がおっしゃったことと重なる部分ではあるのですが、今日では世界各地で起きている紛争当事者の皆さんと呼びかけるかたちで、武力には武力をとという考え方が、将来的には「核には核を」へと発展する可能性を示していると思います。しかし、私は現在の紛争や戦争というのは、当事者とされる国や地域の問題ではないというのが、この宣言文でも伝えたいことだと思いますし、市長が冒頭の説明で様々な意味での当事者を取り入れたとおっしゃっていたので、それを聞いたら、なるほどなと思ったことではあるのですが、この表現では、一部の当事者だけに責任を帰するような、印象を私は一番最初に感じてしまいました。また、当事国の中には、戦争を望まずとも、日々恐怖や困難の中で生きている人や、自分の力だけではどうしようもない人々がいるので、その人たちに呼びかけているような印象になるのは、少し良くないかと思います。加えて、「武力には武力

を」が、必ず「核には核を」に発展するような印象を与えてしまう点にも少し懸念があって、その危険性はあるのですが、断定的につながるかたちで書くには慎重さが求められると思いました。まとめると、この冒頭部分で誰に語りかけているのかというのと、その言葉が誰の責任として響いてしまうのかを、もう一度見直す必要があるのではないかと感じました。

2点目が、27行目と28行目にわたって核兵器を「使わせないために核兵器を持つ」という、核抑止の言及があると思うのですが、先ほども少しおっしゃっていた方がいらっしやったのですが、この核抑止という考え方を知らない人は本当に多いと思うので、その人たちがずっとわかるのかなと感じまして、過去の宣言文をいろいろ調べて読ませていただいたときに、同じように核抑止の説明がこんな感じで説明されていたので、議論の末にこういう表現をされているのかと思ったのですが、共有させていただきました。

そして3点目は、私たちは地球市民として行動していくべきだという趣旨の部分についてです。このメッセージには深く共感しますし、そうした視点をもつということは本当に求められていることで、この部分に関しては本当にいいと思いました。ただ、この地球市民としての行動をしていくべきだと呼びかけるだけでは、実際にどう行動していけばいいのかというところが、抽象的だと思っていて、私も個人の意見としては、どう行動していくか、いろんな方法があると思うのですが、自分自身にとって平和とは何だろうと考え続けること、その時代によって平和の意味というのは変わっていくと思いますし、その過程で自分の考えだったり、調べたりして、行動に結びついたり、対話に結びついたりというのがあると思うので、地球市民といっても一人一人の考え方や背景が異なるからこそ、まさにまずは共に歩んでいくための土台として、自分なりの平和の輪郭みたいなものを描くこと、その大切さを伝えるのはどうだろうかと思いました。

最後4点目は、今年が被爆80年の節目の年であるということです。この歴史的な意味を、文章のどこかで少しだけ強調することができないかと感じました。もちろん言葉として被爆80年という数字的なものを入れることだけが重要だとは思わないのですが、この80年という時間の重みが、単なる年月の経過ではなくて、人々の願いや努力、苦しみ、記憶の上に重ねられてきたものだということを読む人の心にしっかりと伝わるような重みのある表現や、インパクトとして取り入れることができれば、より良いものになるかと思いました。以上になります。

委員長

はい、ありがとうございました。続きまして、委員お願いします。

委員

はい、ありがとうございます。まず、取りまとめ、非常にご苦勞されて、文章も、文字数が限定されている中で、本当に最大限努力を積み重ねてられているということに

感謝申し上げます。まず、すでに多くの委員が言及されているような冒頭、どう評価するかということですが。私は、冒頭市長がおっしゃったように、やはり今、人の痛み、苦しみを知る長崎、被爆地長崎から世界に何を訴えるか、その最優先のメッセージとして、今まさに行われている、まさに今血が流れている、毎日の苦しみを止めるということに1番の重みを置いたというのは非常に評価したいと思っています。そのときに、1行目の当事者という言葉よりも、本当に今すぐ争いを止めてほしいという、このことを最大限訴えるのであれば、戦争を行っている国の指導者というところに言った方がここのメッセージがクリアになると思っています。

そこで、冒頭のここをやはり、今回非常に、もちろん後半のことも当然今回の趣旨で、当事者として、地球市民というところが肝であるのですが、最初の冒頭です、とりあえず言ったというか、浮かせてしまわないために、ここに強調というか文脈でも、長崎が今非常に強い危機感を世界に対してもっているのだというところを、もう少し強調できるのではないかと考えています。そのときにどういう強調の仕方があるかと考えると、やはり一番最後とのリンクだと思うのです。最後は「ノーモア・ヒロシマ、ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャ、ノーモア・ウォー」そこは、もうすでに何人かの方がおっしゃっているように、これが山口仙二さんのお言葉であり、また被爆者も言ってみれば、これまで訴え続けてきた、叫びであるというところは、やはりわからないので、そこは山口さんのお名前を入れるなり、加えるべきだとは思いますが。ただ、何が言いたいかというと、被爆者が訴えてきたことが、つまり核兵器をなくすだけではなくて、やはり戦争を止めなければいけないというところであったというのも、1つの肝であるのです。そうすると、ここには強いサポートとのリンクがあって、やはり被爆者が訴えてきた戦争をやめろというメッセージも、今、打ち崩されているということに対する長崎の怒りや悲しみとか、道徳みたいなものを表すことができるのではないかと、本当に一案ですので、どこがいいかわからないのですが、冒頭で、例えば被爆者がノーモア・ウォーと叫んできたこの叫びに、今こそ耳を傾けてほしいということです。冒頭で争いをやめてください、そして被爆者の叫びに今こそ耳を傾けてください、これが長崎からの訴えですというようなかたちで強く言うことが、もしかしたら先ほど、訴え、インパクトというかですね、メッセージ性というところも言われていたので、効果的になっていく、というよりむしろ被爆者の言葉が、本当にトランプ大統領の先日の発言もそうですが、核兵器の製造が非常に軽んじられていると。そこをやはり長崎としては許せない、看過できない状況だという、ある種その危機感の強さみたいなものが、今どうしてもフラットな少しさらった文章に、冒頭の地球市民の話に入る前のところ、おそらくインパクトが弱いと、もっと何かないのか感じられたものの、何が原因だろうと考えると、やはりそうした長崎の今の強い危機感を強調する表現だと思って、多分私、分量を増やさないでも今のかたちの流れの中に、そういったことを盛り込んでいくことが、当事者と地球市民という、ある種、当事者だったり、地球市民としてというのは、解決に向けた

アプローチの話であって、でもその原因というか、今何が問題なのかというところが多分今回少し分量の関係で、薄めてしまったところだったのかなと思うのです。なので、何とかせつかくのこの冒頭を活かし、被爆者の言葉が消えないように、この 80 年ですね。まさに、今後私たちがこれから先、どんな世界に生きていくのかというところを問うような、80 年という言葉ももちろんそうですが、この文脈が冒頭の 15 行ぐらいまでのところに強く打ち出されると、後ろが生きてくると感じています。はい。以上です。

委員長

はい、ありがとうございます。それでは委員お願いします。

委員

はい、皆さんいろいろおっしゃったこととすごく共通するのですが。まずは非常に大きく変わったということについて、市長から最初の説明があったので、経過はよく理解できたのですが、今日は最後の会議だというのが私の中ではずっと気になっていて、積み重ねられていたかたちが最後の会議では見えている方がいいと思いました。それで、私の考えとしては、出てきている今日のものをあまり大きく変えないでブラッシュアップするのが、今日の仕事という感じで、意見を言いたいと思いました。その上で、まずこれまでも何人かの方がおっしゃいましたが、被爆 80 年というのは、やはりはっきりとどこかに言うべきではないかと思います。その言葉がどこかに出てくるとすると、国連の創設 80 年ということは、被爆 80 年という言葉と響き合うような、表現も少し変える必要があるだろうということも含めてどこかに被爆 80 年ということが長崎にとっては非常に厳粛な節目なのだと。その 80 年の重さということが、語られるような一文でいいと思うのですが、80 年ということをごどこかで言って、先ほど言ったように、国連のところはそれと呼応する表現に変えるのがいいと思います。それから、冒頭の部分ですが、これは市長のご提案があって、改めて必然性というか、そういうことはよく理解できたのです。その上で、これが冒頭にあることのインパクトというのはすごく大きいと思うので、もう少しわかりやすくあるべきだと。わかりにくいのは最初の 1 行が、これもいろんな方がおっしゃいましたが、紛争の当事者というと、やはり被害者も含んでいた当事者というふうになるので、戦争をどう表現するかです。いきなり指導者ということと言うのか、もう少し戦争を止めろということについて、動きうる関係者はどう表現していいかわからないのですが、とにかく早く止めてほしいということの相手をどう表現するかなのです。戦争に関わる関係者の皆さん、というのを考えてみたのですが、指導者というとうどう響くのか、関係者というとうどこまで入のかということをおま整理できてないのですが、そこはとにかく止めるために動けということ、言いたい対象を的確に表現した方がいいと思いました。それをどこに置くのか、冒頭に置くということのインパクト、僕はあるかなと思って。とりわけこの式典に誰を招くかというこ

との、去年いろいろ論争があったと思うのですが。とりあえず、すべての国の指導者を招くと主張してきたと思うのです、長崎は。その立場から言うと冒頭に、だからそこにはみんながいるということなので、長崎でこの言葉を発することの意味とか一貫性というのは、担保されると思いますので、ここに置くというのは、それでいいと思うのですが。最初の1行かな、とにかく、もう少しその切実さが伝わるような訴えにしたいと思います。それから、あとは細かいことですが、最後の山口仙二さんの言葉は、やはり誰の言葉かわかるようにしたほうがいいと、私もそう思いました。それから38行目ですが、言葉の問題で市民に最も身近な政府である都市というのは、都市という風潮もあるかもしれないと思ったのです。ここは英語で言うとミュニシパリティという言葉になると思うので、自治体と言ったほうが、具体的に最も身近な政府ということに合致すると思いました。それからあと50行目の訴えの仕方ですが。日本政府に訴えますと言ったときに、やはりわかりやすく切実な訴えをまず言い切った方がいいと思って、非核三原則を堅持し、一日も早く核兵器禁止条約への署名、批准を果たしてくださいというふうに、まず言い切った方がいいのではないかと。続け方としては、そのために北東アジア非核兵器地帯構想などを通じて核抑止に頼らず、先ほどどなたかが言いました、軍縮に向かう安全保障政策への転換に向け、主導的役割を果たしてくださいとするのはいいと思います。そんなところですよ。大きく構想全体を変えないという前提で意見を試みました。

委員長

はい。どうもありがとうございました。それでは、今一通りご意見伺いました。本当にありがとうございました。全体として、今回大きく変えて、その過程で分量的な制限もありまして、言葉足らずの部分も多々あったかと思います。そういうところについて、こういうことを入れたらいいのではないかと、あるいはこういう表現にしたらいいのではないかとということを含めて、いろんなご提案、ご指摘いただきましたことを、本当に感謝申し上げます。今一通りご意見賜った中で、皆さん他の委員の方のご意見を聞きながら、改めてさらに補足の意見、あるいは追加の意見等ございましたら、おっしゃっていただければと思います。どなたかございますでしょうか。

委員

ありがとうございます。冒頭の当事者の部分に関わることですが、指導者を支持している国民もいっぱいいるわけで、その支持がなければ指導者は倒れるわけですよ、民主主義国家であれば。今戦争しているのは概ね、一応民主主義制度があるところですよ。なので、被害者が含まれるからということで、当事者と言わなくなると、あるいは指導者だけにすると、そこは今の本当の危機から、世界の問題から目をそらす言葉ゲームになるという心配があります。実際に紛争地で困っている人は指導者だけに困っているわけで

はなくて、冷たい国際社会や隣の国の人たち、そういういろんな当事者たちの動きに悩み、苦しんでいるわけだと思いますので、あまり指導者のせいにはしないようにする方がいいかなと。そうすると、どうしても、なんていうのでしょうか、現実を見ないで言葉だけ言っているという印象が冒頭からもたれてしまうとまずい気がしました。

あともう1つ気になったのが、最初のところに戦争をやめてくださいというのはとても大事。ただ、このままでは核が使われますからというのは、そうではない紛争地もいっぱいあるので、そのところをうまく核が怖いから紛争をやめてくださいと読まれないようにした方がいいだろうというところの表現方法の工夫が必要かと思いました。ありがとうございます。

委員長

はい、ありがとうございました、はい。委員お願いします。

委員

ありがとうございます。私も今の先生の意見に全く賛成でございます。それを踏まえてなのですが、今回、時期もあって、いろんな方々に被爆の実相を伝えるという活動をしているのですが、やはり海外の方と会うときには、海外の方々はやはり原爆資料館を見た後の感想などを聞いても、なぜそもそもこういう結末になったのかという原因のところの言及が弱いのではないかというのは、この間10回ぐらい海外の方にお話する機会があったのですが、毎回言われたのです。なので、戦争に対する自分たちの反省であったり、教訓みたいなスタンスを示した上で、被爆の実相についても伝える流れにしないと聞いてもらえないという状況もあり得るんだなということを再認識しています。また、今回、やはり80周年ということで、この間、被爆者の方々がどんなことを言ってきたのだろうということを改めて読み返しておりまして、それこそ長崎新聞の私の被爆ノートとか、そういったものを読んでいくと、やはり核兵器を二度と使ってはいけないということに加えて、非戦、反戦に対する言葉が多くて、その非戦、反戦の言葉は、スローガンというよりも、自分たちに誓いを立てるような言い方なのです。なぜ日本は戦争したのかというところに対しての、原因のところには自分は何をしたのだろうという、自分のそのときの弱さみたいなところに対して、自分を鼓舞するように語っていることが多くて。そうした文脈というか、自分たちの反省みたいなことも含めて地球市民というのを、大事にしてきたのです。忘れないようにするために大事にしてきた。そのために被団協は世界への挨拶の中でもあえて言及したという、その主張のもととの、心みtainところを盛り込むことで、ユネスコ憲章にもある、戦争は心の中で生まれるから、平和のとりでを築かなければいけないというのは、まさにすべての人類に対して言えることを改めて強調するという意味でも、戦争を経験された方々の気持ちを入れる。その中に被爆80年という言葉も必然的に盛り込まれるのではないかと感じました。抽象的で

すみません。よろしくお願いします。

委員長

はい。ありがとうございました。他に何かございますか。はい、委員お願いします。

委員

先ほど、原爆投下で何が起きたのかを入れるべきだというお話をしましたが、伝わりにくいと思って。前回で言うところ、いろいろ表現に問題があるということで、このまま使えないと思うのですが、核兵器は人間を数千度の熱線で焼き尽くし、凄まじい爆風で骨まで砕き、見えない放射線で細胞の1つを破壊し、生涯にわたって苦しめると。キノコ雲の下で何が起きたのかという、基本的な情報が今回入ってないというところで、そこは例えば、先ほども言いましたが、4行目ぐらいのところに入れた上で、世界の皆さん想像してくださいと。こういったことが起きたらどうしますかというところに、実際にあったことをきちんと入れた方がいいと思います。

それと、先ほどから冒頭のところで、本当に難しいなど。当事者を指導者とする、それを支える国民はいいのかという、先生のお話でしたが、そこを何か表現がうまくできないかと感じました。答えは出ませんが。それと、本当に同じようなお話になりますが、やはりすぐ止めてくださいと。このままでは滅亡の一途、核戦争への発展を辿るでしょうと、やはり読まれてしまうところがあるので、やめてくださいというところと、さらにというところだと思うのです。やはり尊い命が大量に失われているという、あるいは、その子どもたちの命が失われているというところを踏まえてやめてくださいと言わなければならない、プラスの部分でそういった可能性が出てくるとか、核戦争の可能性も出てくることを、うまく表現した方がいいと思いました。

委員長

はい、ありがとうございました。他に、はい、委員。

委員

本当にいろんなご意見があって、どうするのがいいのだろうと思いながら、皆さんの意見を聞きながら、できるだけ今の文章を活かすかたちで、うまく伝えられないかと考えてみて、本当に1つの案というかたちですが、さっき委員がおっしゃった15行目の被団協の言及のところからスタートをして、被団協の皆さんがこれまで訴えてこられたことや経験されたことというところで、もう少しその苦しみをきちんと共有できるようなかたちでスタートさせて、28行目の「矛盾に満ちた核抑止の依存が強まっています」と言った後に、8行目の「核兵器は、あなたやあなたの大切な人の日常と未来を一瞬にして奪い去ってしまいます」という、核兵器の恐ろしさを先ほど委員がおっしゃったよ

うなところも少し含めながら、もう一度お伝えをして、「皆、核兵器の脅威に直面する当事者なのです」ということを伝えた後に、また 29 行目に戻って、「このような時だからこそ、私たちは地球市民として行動すべきではないでしょうか」というところをお伝えして、43 行目の「地球市民の一員である、世界の国々の指導者の皆さん」というところに、冒頭にある「武力には武力を」の争いを今すぐやめてくださいというところも含めたような呼びかけのところを踏まえて、指導者全般に呼びかけるというか、戦争当事者の国だったり、その周辺の国に対して言いたいのは、もちろんそうなのですが。日本も含め直接的でなくても、やはり各国のトップの方たちは、多分そこに向かわせるかどうかというカギを握っている人たちであることは間違いのないと思うので、全体に呼びかけてもいいのかと思うのですが。そういう流れをやめませんかということを伝えて、唯一の被爆国である日本政府というところに最後までっていくというかたちで、少し流れを組み替えることで、今皆さんがおっしゃったようなことが解決できないかと思いました。以上です。

委員長

はい、ありがとうございました。はい、委員お願いします。

委員

今、委員がおっしゃった、いわゆる原爆投下でというので、私は子どもたちに落下ではありません。落下を落とす、下と書いて落下と読みますね。原子爆弾は落下ではない。ところが爆心地公園に行かれたら、落下という言葉を使ってある。だから私はあえて子どもたちに落下ではない、投下。投げるに下、目的をもってと言う。ではその目的は何だったのだろうと問いかけています。それから、被爆者の本当にあのときの苦しさ、きつさという、その生の声がやはり出てないような気持ちもします。だから、どこにその文章を入れますかと言われて、私はやはり、ここではノーモア・ヒロシマとカタカナで書いてありますが、「長崎を最後の被爆地に」というあの漢字を使っただけで、そういう一言が絶対ほしいという気持ちがあります。では、それをどこにどう入れるのと言われても即答はできないですが、なんとなくそういう気持ちがします。以上です。

委員長

はい、ありがとうございます。他にどなたかございますか。委員お願いします。

委員

すみません、ありがとうございます。私の方からは、被爆 80 周年というところで、少し考えたところがあるので、共有させていただけたらと思います。

これまでも、おそらく被爆 70 年、75 周年、80 年と、基本的に 5 年ごとの節目でとい

うか、区切りで節目というふうに訴えて、その都度、その時々に合わせて力強いメッセージを発信してきたかと思うのですが、その被爆 80 周年の今年だからこそ、絶対に盛り込まなければいけない、それから強く訴えたいメッセージは何かというのを、もう一段階、もう二段階、深く考えてみてもいいかと思います。私の個人的な基本のスタンスとしては、被爆 81 年、82 年は軽く流してもいいかとか、全くそういうことは思っていない、節目だろうと節目でなくても、いつの時代でも核問題は、人類を破滅させかねない一番大きな問題の 1 つだというスタンスをとっております。その上で 80 周年に何を訴えるのかということも、他の委員の方々からも出たように、すごく大事な問題だと思っております。それを考えるときに、80 周年だからこそ言えること。例えば 85 周年や 90 周年、それから今後くるであろう 100 周年にも言えるようなことは入れなくてもいいのかとされていて、今いろんな国際情勢の慌ただしい変化とか、今だからこそ起きていることと、被爆 80 周年というところを絡めたらなおいいのかと思います。それが被爆 80 周年の今だからこそ、この被爆地長崎が訴えられるほどの大きな意味だと思っております。具体的にこうした方がいい、こういうふうにした方がいいというところではないのですが、被爆 80 周年という言葉、節目の重みという意味での提案をさせていただきます。以上です。

委員長

はい、ありがとうございます。はい、他に何かご意見ございますか。はい、委員お願いします。

委員

はい、ありがとうございます。これから長崎市として、何をしていくのかということですね。例えば、若い人たちを、特に核保有国の青年たちと、やはりこの被爆地の青年たちが話をしていくという。そういう世界的に核兵器はダメだという人たちを、指導者を育てていくことも被爆地として発信し続けていかなければならないと思います。

委員長

はい。ありがとうございます。はい、他に何かございますか。委員お願いします。

委員

私はやはり資料館にある 11 時 2 分で止まった時計。時計は止まった。人間も、そこにいた子どもたちが、3 分を迎えることができなかった人たちが、どれだけたくさんいたかということ。いわゆる核兵器の恐ろしさ、怖さ。時計を見て、ああ 2 分で止まっている。3 分に進んでいないと、人間もよと、人間もよと。そこの下は、本当に 3 分を迎えることができなかった人たちが、どれだけ長崎にはいたのかという。それが今まさに

恐ろしい世界に広がっているという、その辺も本当にわかっているのかな。世界の人たち、指導者の人たちは核兵器、核で核を迎えるなんて。私は先ほど飛行機から投下しましたと言ったけど、今はもっと違うでしょ。怖いでしょ。ボタン1つ押して飛ばすという、そんな世の中に変わってしまっているから。だから、そういうとき、今だからこそ、いわゆる指導者の皆さん、みんなで考えたいという気持ちがあります。

委員長

はい。ありがとうございます。他に何かございますか。先ほど冒頭の、紛争の当事者ということについて、複数の委員の方から、指導者という言い方をしたらどうかというご意見。他方で、指導者というと、その指導者を支持するような、その国民を含めて、主体もいるのだというご意見もございました。そういうことも踏まえ、例えば、それを並べて、紛争当事国の指導者の皆さん、そしてそれを支える人たち、そういうふうに並べて、指導者とその指導者を支える人ということで、そういう指導者を支持して、その指導者をまさに選挙などで選んでいるような国民に向けてこういうのもありますし、また、国際社会で、紛争当事国の指導者をサポートしている国の指導者もいると思います。そういう人たちも含めて、紛争当事国の指導者及びそれを支える皆さんというような、例えばそういう言い方もあると思いましたが、それについて何かご意見ございますか。はい、委員お願いします。

委員

おっしゃることはその通りだし、その指導者を支える人たちがいるのも当然なのですが、あまり詳しく言うのもすっきりしない感じがするので、私は個人的には呼びかけて、その戦争を停戦するとかを最終的に判断するのが指導者なので、簡単に指導者でよくはないかと思ったりしています。

委員長

はい、ありがとうございました。はい、委員お願いします。

委員

ありがとうございます。私も、もしかしたらここは世界の指導者の皆さんというふうに言ってもいいかと思いました。その一方で、私もやはり先生がおっしゃるように、世界の指導者を支持しているのも、また市民であるという認識を伝えることは大事だと思います。なので、例えば地球市民の文脈の中で、いわゆる相手とか敵の命であれば軽く見てしまうのが人間の怖いところであるという。被爆者の方々の反省、戦争を経験された方の反省も含めて言及することで、そのニュアンスを宣言全体の中で盛り込むことができれば、最初のところは指導者と言い切ってもいいと感じました。

委員長

はい、ありがとうございました。ほかに何かご意見ございましたか。はい、委員お願いします。

委員

ありがとうございます。お二方の委員の意見に、私も賛成ではあります。もちろん、特に民主主義国家においては、指導者が戦争をはじめ、それに国民が巻き込まれる状態になりやすいところからも、指導者の皆さんと言い切るかたちも1つかと思います。ただ一方で、日本も最初はそうだったと思うのですが、戦争に実は反対をしているけれども、それを大声では言えない空気が生まれてしまって、本当は反対なのだけれども、戦争に参戦せざるを得ないとか、賛成せざるを得ないような流れになってしまうこともまた事実ではあるかと思います。だから時代の流れとか、国の空気、時代の空気によっては、いくら反対していてもそれをかき消そうという、見えない空気もあるのかということも私個人的にはあると思いますので、指導者の皆さんと言い切るかたちをとりながらも、実はそれを支持しているのもまた国民であるし戦争を駆り立てるのも、国民が一役買っている場面というのもあると思いますので、そこも視点の一つとして踏まえたら、なお良いかと思います。以上です。

委員長

はい、ありがとうございました。他に何かご意見ありますでしょうか。はい、委員お願いします。

委員

今の論議でどちらの考え方もすごくわかりますので、迷うところと思うのですが、確かに指導者と言い切った方が、明確になるというところと、あるいは紛争の指導者および世界の指導者の皆さんという。要は今の紛争の状況というのは一国同士ではなくて、例えばロシアであれば、北朝鮮、中国が関わって来たり、イスラエルだと、もちろん米国をはじめ、関係国が関わって止められない状況になっているというところがあるので、国民のところは置いておくにしても、紛争の指導者および世界の指導者の皆さんというのも1つの案としてあるかなと思いました。

委員長

はい、ありがとうございました。他に、はい委員。

委員

本当に1つの意見として言ってもいいということであれば、やはり私は冒頭のインパ

クトという意味では、どういう呼びかけにしてもいいと思うものの、誰に向けて伝えるのかといったときに、戦争当事国の方もいらっしやっている、聞くという場がつけられるのであれば、最初からやめてくださいという言葉伝えることで、なんとなくその後の話を聞く気になれない感じもしてしまって、やはりまず長崎という場所を知ってもらう。長崎がこんな苦しみを受けてきたことを知ってもらった上で、だから戦争をやめたいのだという思いを知らせた上で、指導者の方に訴えかける流れの方がいいのかと、本当に個人的な意見として言わせていただけるのであれば思いました。

委員長

はい、ありがとうございます。他に何かご意見はございますか。他よろしいでしょうか。どうしても、まだ少し言い残していることとか何かございますか。よろしいでしょうか。はい、どうもありがとうございました。大変参考になるご意見を多数賜りました。

この起草委員会でございますが、今回が3回目ということで、今年度の起草委員会ということでは最終のものでございます。本当にこれまで活発なご討議を賜りまして誠にありがとうございました。今日いただいた、本当にそれぞれ貴重なご意見、大変参考になりました。ある意味、今回お示しした案は、先ほど申し上げました通り、ちょっと舌足らずの部分もあって、それでブランク付きみたいな部分もあったと思いますが、そのブランクを埋めていただくようなご意見を多数いただいたと思っております。

いただいたご意見を参考にさせていただきながら、まさに被爆80周年、この歴史的な意義を感じさせるような宣言文にしていきたいと思っておりますので、またこの後は長崎市の方でしっかりと作成させていただきたいと思っております。

皆様方には5月から毎月、これで3回にわたりましてご指摘いただきまして、誠にありがとうございました。今回しっかりと皆様の思いも一緒にのせながら、世界に誇れるような、そういう宣言文にしていきたいと思っておりますので、また今後とも、皆様方のお力添えを賜るよう、どうぞよろしくお願いいたします。誠にありがとうございました。これで今年の平和宣言文起草委員会を終了させていただきます。本当にありがとうございました。